

# 佐平館がない森の保育

～2025年1月17日から現在まで～

## 【鶴の一声】

佐平館がなくなり、「森の保育」の継続をどうするか？職員



の背を押したのは、当時の社会館園長 宮崎栄樹の「森の保育は、拠点ナシでも実現できることを証明してください」という鶴の一声。そして職員たちは、あの逆境でも「子どもたちに変わらぬ保育を」と気持ちを留めることができました。



## 【子どもたちの存在】

また、大人たちを支えたのは子どもたちの存在でした。「佐平館のお別れ会をしよう」と職員で話し合いを重ね、火事の2日後から子どもたちと一緒に現場を訪れることにしました。そして、佐平館の思い出を共有しながら、「お別れ会」をしました（土曜学校・2つの保育園が実施）。



さらに、3月の火事場撤去前には、卒業生達（中学生から成人まで）が続々と駆け付けてくれました。そして、焼け跡から思い出の品を発掘するためヘルメットと熊手で奮闘。こういった事柄は、職員集団に元気をくれ、私たちはどん底の中でも一步一步進んでいく事ができました。ちなみに、火事直後に前園長のもとに来た小学生2人。「俺たちに佐平館を作らせてください！」と力強い声で宣言！この言葉は、大いに前園長を奮い立たせてくれたようです。



## 【手を差し伸べてくれた方々】

そして、「なにかあれば力になるよ！」とつぎつぎに声をかけて下さったり、現場に駆けつけて下さったりした保護者（卒園児保護者の方も！）の方々や、地元の方々のありがたかった事！火事の2日後から、通常通り再開した「森の保育」でしたが、実際の所、保育の継続は、困難を極めました。

拠点が無い。様々な工事や備品が無い。水・トイレが無い

・・・。必要な環境はその都度、試行錯誤しながら全て整えていきました。職員・講師そして、たくさんのお父さん方が休みを返上して動いてくださり、へとへとになりながら、しかし「こどものために」と奔走し続けてくださいました。



## 【ないないづくしの保育】



実際、保育継続のために実施したことは沢山ありすぎて書ききれません。例えば、田植えの種をまくためのトレーや、土を切る用具などから全て焼失している為、ほぼ毎回、森の日の前には何かしらの準備に奔走する



日々。夏には冷蔵庫がない為にクーラーボックスで毎回冷却材や経口補水液を運搬したり、川で調理の鍋を洗ったり、飲み水をタンクで活動場所まで軽トラックで運んだり、夏の宿泊保育に、寺院や子育てセンター東清分館を拝借したり、その為の計画表を大幅に見直したり・・・。お父さん方には学童保育所から水浴び用プールを運んで頂いたり、職員の着替え・危険物入れの小屋を作成して頂

いたり・・・。

一方で保育面では、逆境を楽しみ、大変さを超える喜びを共有し、「不便を知ることができ良かった」体験へと変換して最高の保育を実践してくれた職員・講師陣の熱意もありがたかった。



土曜学校  
合気道や手芸も青空の下で

## 【今思うこと そして これから】

このように、火事から今まで皆で一步一步進んできたことは、大変でありましたが、ありがたさと喜び、そして希望を強く感じる日々でもありました。今は一層、前園長のこの言葉が強く感じられます。

「絶望の中それでも前を向いて生きる」 「ピンチはチャンス！」

「周囲の行動から悪意を読み取らない・周りにはあなたの味方」

大人たちの奮闘の結果、逞しく成長した子どもたちの姿が、今私たちの目の前にあります。保育の継続へご協力くださった全ての皆様へ、心より感謝申し上げます。



2026年3月吉日 社会福祉法人木更津大正会 理事長 各津 恕榮